
眠らぬ森の魔女

RAINDROP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠らぬ森の魔女

【Nコード】

N8057X

【作者名】

RAINDROP

【あらすじ】

魔女は森に誰も眠れぬように魔法をかけました。そしてその「眠らぬ森」にひとりの少女が迷い込むのですが……。

遠い遠い国のある広くて深い森の奥に、一人の魔女が住んでいました。彼女はあるときとても強力な魔法を使って、あたり一面を魔法の森に変えてしまいました。

その森では何もかもが眠りにつくことができませんでした。鳥も、動物たちも、花や木々や小さな虫、土も水も風も、一時だって眠ることができず、朝から夜までずっと起きていなくてはなりませんでした。

森に住むものたちはもてあました時間を魔女のために使うことになっていました。木々は夜のあいだにひとつ余計に果実を実らせ、動物達はその実を収穫しておいしいお菓子や料理を作ります。鳥たちは朝にはダンスを、夜には歌を歌い、森をにぎやかな音楽で彩るのです。虫達も音楽に合わせて伴奏をつけ、風もかるやかにステップを踏みました。ゆかいな森の宴は休むことなくずっとずっと続いていました。

あるとき、森の中に女の子が一人迷い込んできました。森の中の賑やかな様子を見て、女の子は楽しい気分になりましたが、どうしてこんなに賑やかなのか不思議に思って、近くでバイオリンをひいているコオロギにたずねました。

「ねえ、コオロギさん。どうしてこの森はこんなにもゆかいな音があるのかしら」

コオロギは演奏の手を休めることなく答えました。

「森の魔女のためなのさ。ここじゃあみんな眠れない。時間が余ってすることがないから魔女のご機嫌をとろうというのさ」

「どうして魔女のご機嫌をとるの」

「機嫌がよければ魔女が魔法を解いて眠れるようになるかもしれないからね！」

女の子はこの森では眠れないというのをきいて驚きました。ベッ

ドに潜り込んでぐっすり眠れないことも、目を閉じて夢を見ることもできないことも、女の子は一日だってなかったのですから。

コオロギに別れのあいさつをして（コオロギのほうは演奏に夢中であいさつを返してくれませんでした）、女の子はさらに森の奥へと歩いて行きました。すると、今度は泉のほとりで合唱するカエルと鳥たちに出会いました。

「こんにちは、みなさん歌がおじょうずね」

女の子はカエルたちに話しかけましたが、みんな歌うのをやめないので返事はありませんでした。仕方なく、女の子は歌に耳を傾けることにしました。

ここは眠らぬ魔女の森

誰も眠れぬ闇の森

枕もベッドもありやしない

歌と踊りで機嫌取り

喉がかれても歌うのさ

足がもげても踊るのさ

その歌をきいて、女の子はなんて恐ろしいのだろうと思いました。歌も踊りも休憩なしですつと続けるなんて疲れてしまいます。

カエルと鳥たちの歌にあわせるように、泉の向こう岸から動物達の歌が聞こえてきました。

ここは魔女が見張る森

眠れぬ魔女が歩く森

食事もおやつも足りやしない

二時間おきに機嫌取り

かまどに火をくべパンを焼く

木の実を煮詰めてジャムを塗る

香ばしいパンの焼けるにおいと、甘いジャムのおいが風に乗って運ばれてきました。誰も眠れずに動き続けているので、すぐにお腹がすいて食事もたくさん用意しなくてはならないのでしょうか。

魔女はどうしてこんな森を作ってしまったのでしょうか。誰も眠ることができないなんて、いつか疲れて倒れても目を開けて起きていなくてははいけないのです！

女の子は魔女に会いたいと思いました。こんな魔法はおかしい、と言ってやろうと考えたのです。

すると、ちょうど森の奥から黒い服を着て大きな帽子をかぶった魔女がゆっくりゆっくり歩いてきました。あたりの木や花が、魔女だ、魔女がきたぞ、と葉っぱをざわざわさせて囁き合いました。

「あなたが森に魔法をかけた魔女ね？」

女の子は魔女に近寄ってたずねました。

「ああそうだよ、お譲ちゃん。私がここを眠れぬ森にしたのさ」

魔女は三日月の形に歪ませた口からぎらぎらした歯をのぞかせて、にたりと笑って言いました。

「どうだい、素晴らしいだろう。いつだって歌と踊りにあふれて、おいしい料理が食べられる。まるで天国だとは思わないかね」

女の子は首を横に振って、魔女を睨みつけました。

「いいえ、天国なんかじゃないわ。魔法で無理やり歌わせて、踊らせて、作らせて、疲れても休ませないなんてひどいじゃない」

「おや、休憩なんていらさないさ。この森には無駄なものがないんだよ。誰もがわたしのために尽くしてくれる。眠ってる時間がもったいないじゃないか」

「おかしいわ、ええ、あなたはとてもおかしいわ。自分が楽しい思いをしたいだけじゃないの！」

女の子の言葉に機嫌を損ねたらしい魔女は、いきなり杖を女の子に振りかざして叫びました。

「ああ、なんてうるさい娘なんだい！ 風鈴に変えて窓につるしてやろうかい！ ずっと風に揺られて歌い続けるといい、そのほうが

さぞゆかいだろうねえ！」

次の瞬間、杖の先からまばゆい光が放たれ、女の子を包み込みました。そして、女の子はみるみるうちに小さな風鈴になってしまいました。女の子は大声で叫んだつもりでしたが、ちりんちりんとかわいい音が響くだけでした。

「この森でわたしには向かうからだ。さあ、家の窓につるしてやるうかね」

魔女は風鈴をつまみあげ、森の奥に戻っていきこうとしました。しかし、風鈴を持つとうとしてもなぜだか重くて持ちあげることができません。

「なんだい、魔法をかけるのに失敗したのかね」

魔女が首をかしげていると、風鈴からもくもくと煙が噴き出し、なんとともに女の子の姿に戻ってしまったではありませんか！ 驚いた魔女は再び杖を振って魔法をかけようと思いますが、女の子の様子はなにも変わりません。

「どういうことだい、これは？ 魔法が効かないなんて！」

「あなたはやってはならないことをしたのよ。もう魔法は使えないわ」

女の子は慌てる魔女に向かって静かに言いました。

「あなたは死神に魔法を使ってしまったの」

「死神だつて？」

魔女はわなわな震えて後ずさりしました。

「契約違反よ。わたしたち死神の仕事を邪魔しないかわりに魔法が使えるようになったというのに、あなたはその約束を破ったわね」

「風鈴にしちまったことは謝るよ、だからまた魔法を使えるようにしておくれよ」

「いいえ、それよりもこの森のことが問題だわ。誰も眠りに着けなくするなんて、わたしたちの仕事が減ってしまうじゃない。

あなた、みんなとつくに寿命を越してしまっていたのに気付いてないの？」

女の子にそう言われたとたん、魔女の肌はみるみる爛れてはがれおち、髪がばらばら抜けて骨だけになってしまいました。あたりの植物も魔法が切れて次々に枯れてゆき、動物達もぴたりと動きをとめてばたばた倒れてしまいました。土は砂に、水は泥に、風もすっかりやんで、あたりはただ荒れ果てた枯れ野原が広がっていました。「さあ、これで仕事ができるわね。終わった後の食事と昼寝が楽しみよ」

女の子は笑顔でそう言って、地面に転がる魔女の骨を見つめました。

あわれな魔女は眠らぬ森を失って、とうとう眠りにつきましたが、本当の天国に行けたのかどうかは死神にしかわかりませんでした。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8057x/>

眠らぬ森の魔女

2011年10月22日02時23分発行